

話し合いでの「不同意コミュニケーション」における「配慮」の様相 —接触場面での物事を決める話し合いの分析から—

金 桂英

【キーワード】 話し合い・接触場面・不同意コミュニケーション・配慮

【要旨】

本稿では、物事を決める話し合いでの「不同意コミュニケーション」において、表現主体の試みた「配慮」が理解主体に認識されたものと、理解主体に認識されていないものを明らかにした。

分析で明らかになった配慮を類似する内容別にまとめた結果、〈表現形式〉と〈表現内容〉という二つのカテゴリーが浮かび上がった。表現形式には、(1)意見を緩和する表現形式、(2)話を続けやすくする表現形式という二つの概念が内包されている。(1)意見を緩和する表現形式として、語尾は断定を避ける配慮、(2)話を続けやすくする表現形式として、語尾は同意を誘う問いかけにする、語尾は確認表現を活用する配慮がみられた。表現内容には、(1)意見を緩和する表現内容、(2)相手の理解を促す表現内容、(3)親しさを表す表現内容、(4)曖昧な表現内容という四つの概念が内包されている。(1)意見を緩和する表現内容として、「不同意表明」の前に理解を示す、「不同意表明」の前に同意の意見を述べる、「不同意表明」を暗に示す理由のみ提示する、迷いを表す配慮、(2)相手の理解を促す表現内容として、理由や根拠を伝える配慮、(3)親しさを表す表現内容として、意図的に「突っ込む」配慮、(4)曖昧な表現内容として、曖昧に伝える配慮がみられた。

これらの「配慮」のうち、理由や根拠を伝える配慮と、曖昧に伝える配慮は、表現主体と理解主体とでずれた配慮である。表現主体と理解主体とでずれが生じたのは、話し合いにおける決定権の「当然性」の捉え方と、相手の意図を適切に理解していないことがその一要因として考えられる。このような問題を解決するためには、日本語教育で話し合いでの「不同意コミュニケーション」を扱う際に、表現だけではなく、相手の意図を読み取る能力や決定権の「当然性」の捉え方も視野に入れる必要があると言えよう。

1. はじめに

言語生活においては、話し合いの場面が多々存在する。話し合いにおいて、同意の意見だけではなく、相手の意見に不同意を表明したり、相手に不同意を表明されたりする状況

に直面する。不同意表明は相手の体面を傷つけ、配慮のない人間だと思われる危険性があるため、コミュニケーション主体は自覚的に様々な配慮を凝らす可能性があり、配慮を巡るコミュニケーション主体の意識を確認することができると考えられる。また、野田(2012)では、配慮したつもりなのに、よい印象を与えない配慮表現や言語行動は、文法や語彙の不自然さと違い、人格の問題だと思われる危険性があると指摘している。このような問題を解決するためには、不同意コミュニケーションにおける配慮を究明していくことが重要な意味を持つと考えられる。現実には不同意を表明せざるを得ない場面も存在する以上、コミュニケーション主体は各自様々な配慮を凝らしているのではないだろうか。その意味において、日本語の教育や学習について考察していく際にも、不同意コミュニケーションにおける配慮の様相を明らかにすることが重要な課題になるのではないだろうか。

以上のような問題意識に基づき、本稿では、話し合いでの「不同意コミュニケーション」における「配慮」の様相を捉えることにした。具体的には、談話資料とフォローアップ・インタビュー(以下、FUIと略す)で引き出したコミュニケーション主体の意識および内省を基に、表現主体の試みた「配慮」がどのような意識で、どのように表現されているのか、また、理解主体にそれがどのように認識されているのかを明らかにする。そして、【1】表現主体の配慮が理解主体に認識された配慮、【2】表現主体の配慮が理解主体に認識されていない配慮がどのようなものなのか明らかにすることを研究目的とする。

2. 先行研究と本稿の位置づけ

不同意表明は、人と人で行われる重要な言語行動として、今まで様々な視点からの研究が積み重ねられてきた。木山(2001)は、「意見の異なり」が表れるように設定された接触場面の話し合いにおける、母語話者と学習者それぞれのコミュニケーション原理を明らかにしている。梶本(2004)は、ロールプレイによる親しい関係の母語話者同士の会話から、提案に対する反対の伝え方を多角的に分析している。また、吉川(2007)は、共同論文の執筆、グループによる発表用資料の作成などを目的として、三人以上でやりとりされたメールによる話し合いを分析対象にし、異見表明の方法を観察している。このように、先行研究において日本語による不同意表明の仕方やその特徴が示されている。

しかし、先行研究の多くは、分析資料としてロールプレイや刺激文による実験形式のインタビューなどを取り上げており、実際に物事を決める話し合いにおける談話を扱っているものは、管見の限り非常に少ない。さらに、コミュニケーション主体の意識、認識に着目した研究は見当たらない。そこで、本稿では、実際に物事を決める話し合いでの談話資料の収集を行い、表現主体と理解主体という両者の立場から、不同意表明の背後にあるコミュニケーション主体の意識、認識を抽出する。さらに、連続するやりとりの中から「不同意コミュニケーション」を捉え、表現主体と理解主体双方の立場から、「不同意コミュ

ニケーション」において、表現主体の「配慮」がどのような意識に基づき、どのように表現されるのかという表現行為と、相手の「配慮」をどのように受け止めているのかという理解行為、そうした「やりとり」の「くりかえし」である相互行為の実態を分析する。

3. 用語の規定

本稿における「不同意」とは、コミュニケーション主体Aが自分の考え方や意見とは異なる表現内容を含むコミュニケーション主体Bの表現を理解して生じる、それに対して賛同できない認識のことである。「不同意表明」とは、コミュニケーション主体Aがコミュニケーション主体Bに対し、不同意の認識を伝えるため、相手の考え方や意見とは異なる表現内容を含む表現を行うことである。「不同意コミュニケーション」とは、コミュニケーション主体Aが、「人間関係」や「場」を考慮しながら「不同意表明」を行い、コミュニケーション主体Bがその「不同意表明」を理解すること、および、コミュニケーション主体AとBが「不同意表明」とその理解を行う一連の相互行為と規定する。

本稿における「配慮」とは、コミュニケーション主体Aが、「不同意表明」を行うことにより生じる問題を緩和するために、コミュニケーション主体B、および「場」の状況に対し、何らかの気配りや気遣いをするることである。本稿では、コミュニケーション主体の意識を重視し、「不同意コミュニケーション」における「配慮」を研究主体の視点から決めるのではなく、実際にコミュニケーションを行っているコミュニケーション主体が自分の意識や内省をもとに、自ら決定するものである。

4. 調査方法と分析の手順

本稿では、日本語母語話者と日本語学習者のペア4組（20代の男女8名）によるやりとり（以下、接触場面と略す）を分析する。自由に日本語でのコミュニケーションができる学習者を調査対象とするため、日本語能力が上級レベル¹で、日本での滞在年数が一年以上の学習者に調査協力を依頼した。調査協力者²の具体的な情報は、表1の通りである。

<表1：調査協力者の一覧>

談話資料の番号	コード (年齢)	出身地	日本語学習歴	日本滞在歴
i	JFO (20代前半)	東京	—	—
	CFO (20代前半)	中国	約5年	約3年
ii	JMP (20代前半)	千葉	—	—
	CMP (20代前半)	中国	約3年	約2年
iii	JFR (20代前半)	東京	—	—
	CFR (20代前半)	中国	約3年	約2年
iv	JFZ (20代前半)	埼玉	—	—
	CFZ (20代前半)	台湾	約5年	約3年

談話資料の収集方法は、調査協力者Aにサークルやプライベートなどで、二人で物事を決める話し合いを録音させてもらいたいため、話し合いを行う前に連絡するよう依頼した。調査協力者Aの連絡をもらった後、調査協力者Bに調査の旨を伝え、調査協力を依頼した。調査協力者AとBの了承を得た後、その場で二人の話し合いをICレコーダーに録音した。調査協力者には、基本的に談話資料を収集してから三日以内に個別にFUIを行った。

本稿では、表現主体の配慮が理解主体に認識されたもの、表現主体の配慮が理解主体に認識されていないものを分析対象とする。4組の談話資料から表現主体と理解主体が「不同意コミュニケーション」の一部だと認定した談話資料のうち、調査協力者が配慮がみられたと認定した箇所を取り上げ、分析する。本稿では、談話資料から事例を抽出する際に、「不同意表明」が表れた箇所とその「不同意表明」の対象となる相手の表現内容を合わせて抽出することとする。「不同意表明」の対象となる相手の表現内容については、談話資料とFUIを基に、その後になされる「不同意表明」に直接関係があると判断したところをその範囲とする。「不同意コミュニケーション」を連続するやりとりのなかで分析するため、まず、談話資料毎の分析を行う。分析が一通り終了した後、分析結果をまとめる。具体的には、まず、分析で明らかになった配慮を、類似する内容別にまとめる。次に、修正版グラウンデッドセオリーを参照し、類似した内容別にまとめた配慮を基礎データとし、分析ワークシートを用い、概念生成を行った。生成した概念をカテゴリー毎にまとめた。

5. 分析結果

5. 1 談話資料 i の分析結果

今回、収録した談話資料 i は、今まで JFO が関わっていた番組に、これから CFO が加わることになり、番組の中身について話し合うために行われたものである。この番組において、CFO が新人、JFO が既存のメンバーであるため、JFO のほうが番組について詳しい。JFO と CFO は、大学で知り合った友人で、プライベートでも会い、お互い仲がいいと認識していた。同じ学年だが、CFO のほうが年上である。

事例 1

ライン番号(N ₀)	話者	発話内容
1	CFO	番組なんだけど、〈その…〉 {<} 【【。
2	JFO	】> 〈ラジオ〉 {>} 番組ですね。
3	CFO	そのラジオ番組が、音声を中心にやっているけど、私は、その音声中心よりも、もっと動画とか映像を使ったものを取り入れたほうが、すっごく番組が盛り上がるんじゃないかなあと…。
4	JFO	ええと、そうなんですけど、ラジオなので、あくまでもメインは音声なんですよね。(うん) なんて、まあ、ただ確かに動画があったほうが見る人は分かりやすかったり、インパクトも強いんで、(うーん) まあ、導入部分として使うのは、悪くないと思ってるんですけど…。(うーん) 〈まあ…〉 {<} 【【。
5	CFO	】> 〈でも〉 {>} 今どき、聞く人っていないと思うんだよね。やっぱ、これが

- らもつと発展に移るには、ねえ、20代、30代。30代はラジオを聴くかもしれないけど、(うん) 20代の方は、今はもうラジオを聴く世代じゃないし、やっぱり映像を使わないと、番組を聞こうという人がいないんじゃないかと…。
- 6 JFO 確かに言われた通り、30代と40代の方が一番多いけど、あのう、まあ、音声だけのメリットっていうのけっこう大きくて、例えば、なんかしながら、(うん) 聴けるとか、それこそ通勤途中に、(うん) 聞けたりするわけですよ。音声だとそれが可能だけど、映像が入っちゃうとそれができないんじゃないですか。
- 7 CFO いやいや、映像でも今スマートフォンとかで映像見れるでしょう？電車の中で、けっこう見てる人いるけど…。
- 8 JFO あー、確かにそうだなあ。
- 9 CFO 音声だけって、(うーん) やる意味があるのかなあと思って…。
- 10 JFO あのう、そうですね。まあ、正直な気持ち、映像を取り入れるのって、けっこう大変なので、(うーん) そういう理由もあるんですね。(あー) こっちとしても…。(あー) 音声だけのほうが、あのう、映像が入るとやっぱり編集も倍、倍というか、もうめっちゃめっちゃかかるし…。<ラジオだと…> { } 【。】】 <えー、そうかなあ…> { } 一緒じゃない？音源を編集するって、映像を編集するって…。
- 11 CFO いやいや、違うでしょう？[↑] 例えば、私だって、しゃべる立場ですけど、あのう、音声だったら、別にスピークでもいいけど、映像だったら化粧とかしなきゃいけないわけですよ。
- 12 JFO あー、確かにね。そうか。そういうのを気にするか。確かになあ…。
- 13 CFO しょう？[↑] (あー) その差は、けっこう大きい。(あー) 後、やっぱり手軽さ、音声ならではの…。取るほうもそうだし、聴くほうもたぶん、ほら耳、ほらなんかしながらさ、電車の中だったら確かに映像見れるかもしれないけど、例えば、なんかの作業をしながら、例えば、建築の図面を書きながら聞くとかいるんですよ。(うん) だから、まあ、仕事しながら聴けるといって、(うーん) 聴きながらだと。だから、その辺のメリットは大きいんだよね。
- 14 JFO あー、そうだね。
- 15 CFO そう。
- 16 JFO 聴きながらの作業は確かにいいかもしれない。
- 17 CFO そうそう、そうなの。
- 18 JFO そういう聴きながらのラジオ番組を目指している？。
- 19 CFO そうですね。そんなに力を入れないで、聴けるっていうのが、一番 (あー) いいスタンスかなあと思ってるけど…。
- 20 JFO なるほど。
- 21 CFO はい。
- 22 JFO そうか。
- 23 CFO 映像もメリットは分かっていますね。やっぱり YouTube なんかも回数も出るし、(うーん) 分かりやすいし、(うーん) やっぱりどうしても浸透してるのが、動画だったりするわけで、(うーん) それこそ YouTube とかは分かるとしても、ラジオとしたら、分からない人まだいっぱいいるので、(うーん) 確かに、動画の必要性は感じてはいるんだけど、(うん) それをやってしまうと、(うん) ラジオ局ではなくなってしまうので、(うーん) あくまで音だけに拘っていきたくないなあと思っていますけどね。
- 24 JFO なるほど。そうか。
- 25 CFO

談話資料 i の事例 1 は、JFO と CFO が、番組に映像を取り入れるか、取り入れないかについて話し合っている。CFO は、映像も取り入れたほうが良いと思っているのに対し、JFO はラジオ番組であるため、音声のみで良いと主張しており、不同意表明が表れた。

CFO は、ライン №3 で映像も取り入れたほうが良いという自らの意見を示しているが、ライン №4 と №6 で、JFO に不同意表明を行われている。CEO は、ライン №5、№7、№9 で理由や根拠を伝え、自分の意見を主張している。CFO への FUI で、「語尾を断言していないのは配慮だ。意見が強くなならない」と述べていた。ここで、CFO は電車の中で見てい

る人がいる、音声だけで意味がないという内容を伝える際に、意見を緩和するため、「けっこう見てる人いるけど…」 「やる意味があるのかなあと思って…」³と伝え、語尾は断定を避けていることが分かる。それに対し、JFOは「言い方だけど、断定していないので、言い方が柔らかい」と報告していた。ここから、意見を緩和するため、語尾は断定を避ける配慮は、相手に伝え方が柔らかい印象を与え、受け止めやすくすることが分かる。

CFO から、番組に映像も取り入れたほうが良いと伝えられた JFO は、音声のみ扱っている理由や根拠を伝え、不同意表明を行っている。JFO への FUI で、「私は映像を取り入れないで、音声だけのほうが良いと思っているので、不同意している。不同意する時に、自分の意見ばかり言うのではなくて、「そんなんだけど」と理解していることを伝えたり、CFO ちゃんの意見の中で同意できる部分もけっこうあったので、同意できる意見も伝えながら、自分の意見を主張しているのは配慮だ。あまり自分の意見ばかり言うと、喧嘩みたいになって嫌だろう」と述べていた。ここで、JFO は意見を緩和しながら不同意表明を行うため、不同意表明の前に「そんなんですけど」と相手の意見に理解を示したり、「確かに言われた通り、30代と40代の人が一番多い」「確かにそうだなあ」など同意の意見を示しながら不同意表明を行ったりすることが分かる。それに対し、CFO は「かなり配慮している。お互いに主張し合っているけど、JFO はちゃんと私の意見を聞いてから、不同意しているので、受け入れやすかった。最後に納得した」と報告していた。ここから、不同意表明の前に、理解を示す、同意の意見を示す配慮は、受け止めやすくすることが分かる。

5. 2 談話資料 ii の分析結果

今回、収録した談話資料 ii は、JMP と CMP が新学期に向けての活動について話し合うために行われたものである。JMP と CMP は、サークルで知り合っており、JMP が先輩である。二人は主にサークル活動のために会い、知り合って半年くらいだと言う。

事例 1

ライン 番号(N ₀)	話者	発話内容
5	JMP	曜日は…。
6	CMP	金曜、やってみます?。[↑]
7	JMP	金曜日、どうかなあ…。バイトとかあるんじゃない?。[↑]
8	CMP	他の日がいいですか。[↑]
9	JMP	土日…。
10	CMP	いや、<でも…> {<} 【 】【。
11	JMP	】】<まあ、> {>} やってみてもいいけどね。試しに。
12	CMP	じゃ、試しにやってみますか。[↑]
13	JMP	うーん、でも、やっぱり難しいかなあ…。「姓1」さんと「姓2」さんは、ゼミがあると言ってたし、金曜に。 <small>沈黙2秒</small>
14	CMP	そうか。土日もいろいろ予定がありそうですけどね。(うーん)他の人にも聞いてから、決めましょうか。
15	JMP	うーん、そうだね。

談話資料 ii の事例 1 は、JMP と CMP が、活動を実施する曜日について話し合っている。CMP は金曜日がいいと思っているのに対し、JMP は週末がいいと思っているため、不同意表明が表れた。

ライン№6 で、CMP から「金曜、やってみます？」と提案された JMP は、ライン№7 で不同意表明を行う。JMP への FUI で、《私が知っている限り、金曜日にバイトに入ったり、飲み会がある子が多いので、土日のほうが無難な気がしていたので、金曜日に活動をやることについては、不同意ごみだね。「だめだ」と言うとストレートのだから、「どうかなあ」と迷いを表している。また、「バイトがある」と言い切るのではなく、「あるんじゃない？」と聞いている》と述べていた。ここで、JMP は意見を緩和するため、金曜日はだめだと直接的に伝えるのではなく、「金曜日、どうかなあ…」と迷いを表したり、金曜日はバイトとかあると言い切るのではなく、「金曜日、バイトとかあるんじゃない？」と語尾は同意を誘う問いかけにしたりすることが分かる。それに対し、CMP は《「どうかなあ」「～んじゃない？」と言い切っていないので、言い方が柔らかい。配慮したと思う》と報告していた。ここから、意見を緩和するため、迷いを表す、語尾は同意を誘う問いかけにする配慮は、相手に伝え方が柔らかい印象を与え、受け止めやすくすることが分かる。

ライン№10 で、CMP から「いや、でも…」と言われた JMP は、ライン№11 で「まあ、やってみてもいいけどね。試しに」と述べている。JMP への FUI で、《ぼくは無理だと思っているけど、彼は金曜日にやりたいと言っているから、気を使って「やってみてもいいですけどね」と伝えてあげた。「やってみてもいいですけどね」というのは、文字的には肯定的なイメージだけど、そのなかには実際はやりたくないという気持ちが入っている。日本人全般こんな感じだけど、CMP さんは本気だと思ったようで…」と述べていた。ここで、JMP は金曜日に活動をやりたいと思っている相手の気持ちに配慮し、「やってみてもいいけどね」と伝えているが、そのなかには実際はやりたくないという気持ちが込められていることが分かる。一方、CMP は《乗る気だと思ったが、後でまた無理だと言われたので、「どっちなよ」と思った》と報告していた。ここから、CMP はことばを額面通り捉え、JMP が金曜日にやってみてもいいと思っていると理解し、JMP と CMP とでずれが生じていることが分かる。このように曖昧に伝えることは、日本人の間ではよく使われるようだが、CMP は表現の奥にある意図を上手く読み取れていないことが伺える。

5. 3 談話資料 iii の分析結果

今回、収録した談話資料 iii は、JFR と CFR が旅行の場所や日程などを話し合うために行われたものである。JFR と CFR は、同じ大学の友人同士である。知り合って 2 年ぐらいで、プライベートでもよく会い、お互い仲がいいと認識していた。

事例 1

ライン番号(N _o)	話者	発話内容
1	CFR	どこに行きたい？。
2	JFR	<国内なら…> {<} 【 【。
3	CFR	】】 <私伊豆> {>} がいい。
4	JFR	伊豆でいいの？せっかくの国内旅行、もっといいところあるぜ。伊豆より。
5	CFR	じゃ、スキーに行こうか。こうやって、ちらっと見て…。
6	JFR	「CFR 姓」ちゃん、なんか日本で行きたいところない？。
7	CFR	沖縄。
8	JFR	沖縄、私行ったことないんだ。
9	CFR	私も行ったことない。
10	JFR	沖縄、いいね。
11	CFR	じゃ、沖縄にしましょう。
12	JFR	そうしよう。

談話資料 iii の事例 1 は、JFR と CFR が、旅行の場所について話し合っている。CFR から伊豆に行きたいという意見を聞いた JFR は、せっかくの旅行なので、もっといいところに行きたいと思っているため、不同意表明が表れた。

ライン N_o4 で、JFR は不同意表明を行っている。JFR への FUI で、《気をつかって、「伊豆じゃないほうがいいよ」と言わないで、「伊豆以外にもいいところあるよ」と伝えたと述べていた。ここで、JFR は相手に配慮し、直接的に伝えるのではなく、「もっといいところあるぜ。伊豆より」と不同意表明を暗に示す理由のみ提示することが分かる。それに対し、CFR は《伊豆よりいいところがあると云われたので、受け止めやすかった》と報告していた。ここから、不同意表明を暗に示す理由のみ提示する配慮は、意見を受け止めやすくすることが分かる。

事例 2

ライン番号(N _o)	話者	発話内容
13	CFR	沖縄 3 泊 4 日でいいや。
14	JFR	沖縄いつの時期に行くかによって、だいぶ変わるよ。
15	CFR	そう？。[↑]
16	JFR	沖縄か…。
17	CFR	水族館行きたいから…。
18	JFR	あー、水族館は外せないね。
19	CFR	うん。だから、3 泊 4 日でいいじゃん。だって、沖縄行くのに飛行機乗らないといけないでしょう？。[↑]
20	JFR	乗らなきゃだね。
21	CFR	じゃ、3 泊でいいや。
22	JFR	3 泊で…。

談話資料 iii の事例 2 は、沖縄で何日ぐらい旅行するのかについて、話し合っている。

ライン№13で、CFRから「3泊4日でいいや」と言われたJFRは、ライン№14で時期によって、滞在日数が変わると伝え、不同意表明を行っている。JFRへのFUIで、《時期によっては、もうちょっと泊まったり、もうちょっと早く帰ったりすることもできると思ったので、不同意している。あからさまに言わないで、「時期によって違うよ」と伝えた》と述べていた。ここで、JFRは相手に配慮し、直接的に伝えるのではなく、「沖縄いつの時期に行くかによって、だいぶ変わるよ」と不同意表明を暗に示す理由のみ提示することが分かる。それに対し、CFRは《JFRは時期によって日にちが変わると言っているけど、婉曲に話している。受け止めやすかった》と報告していた。ここから、CFRは、不同意表明を暗に示す理由のみ提示する配慮は、意見を受け止めやすくすることが分かる。

ライン№14で、JFRから滞在日数は時期によって異なると言われたCFRは、ライン№17と№19で、なぜ3泊4日にしたいのか説明している。CFRへのFUIで、《なぜ3泊4日にしたいのか、理解してもらいたかったので、ここで説明している》と述べていた。ここで、CFRは、相手の理解を促すため、理由や根拠を伝えていることが分かる。それに対し、JFRは《3泊4日間行きたいと、説得しているように感じた。配慮はしていない。逆に、CFRちゃんが私の意見を聞いていなかったの、押し付けを感じた》と報告していた。ここから、CFRの不同意表明の後、理由や根拠を伝える配慮に対し、JFRは配慮されたとは認識しておらず、説得されているように感じているとともに、意見の押し付けを感じていることが分かる。

事例3

ライン番号(№)	話者	発話内容
55	CFR	で、日月火でしよう？[↑]で、最初に行って、空港行って、着いて…。
56	JFR	着いて、とりあえず那覇。
57	CFR	那覇行って、ここ行って終わりじゃん。(うん)最終的に終わりじゃん。(うん)夜、到着だから、夕食じゃん。
58	JFR	でも、そんな飛行機の時間にもよるんじゃない？[↑]朝早く出で…。
59	CFR	そう？[↑]3日間の2でしよう。
60	JFR	到着フリータイムと書いてあるから、到着したらもう好きに出ていけばよいでしょう？。
61	CFR	到着フリータイムだから、〈行って…〉{<}【【。
62	JFR	】】〈海に入りたい〉{>}とかないの？[↑](うーん)なんか水着にならなくてもいいから、ちょっと波##まで触ったり…。
63	CFR	うん。それ、それいいなあ。
64	JFR	そうだね。ええと、その波##するのをどこに持ってくるかだね。
65	CFR	そうだね。いちおう着いて、だって、やっぱりホテル内にさ、(うん)最初の1日目は外に出たくないよね。2日目だったらいいけど。1日目は出たくないから…〉{<}【【。
66	JFR	】】〈なんかわりと〉{>}都会的なところを見て回りたいね。
67	CFR	そうそう。都会みたいなおところを見て…。

談話資料iiiの事例3は、沖縄に着いてからのスケジュールについて話し合っている。

ライン№57 で、CFR から那覇への到着は夜になるという話を聞いた JFR は、ライン№58 で不同意表明を行っている。JFR への FUI で、《朝、早い飛行機に乗ると、当日も何かできると思ったので、不同意している。先と同じく、あからさまに言わないで、「飛行機の時間にもよるんじゃない?」と聞いている》と述べていた。ここで、JFR は相手に配慮し、直接的に伝えるのを避けるため、「飛行機の時間にもよるんじゃない?」と不同意表明を暗に示す理由のみ提示していることが分かる。その際に、語尾は同意を誘う問いかけにしていることが分かる。それに対し、CFR は《飛行機の時間によって違うと言ってはいるけど、婉曲に話している。受け止めやすかった》と報告していた。ここから、不同意表明を暗に示す理由のみ提示する、語尾は同意を誘う問いかけにする配慮は、意見を受け止めやすくすることが分かる。

5. 4 談話資料ivの分析結果

今回、収録した談話資料ivは、JFZ と CFZ が卒業旅行の場所や日程などを話し合うために行われた。JFZ と CFZ は、同じ大学の友人同士である。知り合って4年ぐらいで、プライベートでもよく会い、お互い仲がいいと認識していた。

事例1

ライン番号(No)	話者	発話内容
4	JFZ	私ね、国内だったらね、北海道か、沖縄か、広島に行きたい。
5	CFZ	遠くない?近いでいいでしょう?。<2人で笑い>
6	JFZ	でもさ、卒業旅行と言ったら、やっぱりこう一週間ぐらい<時間を取って…> {<} I I。
7	CFZ	I I <じゃ、国外でいいや。> {>} 台湾で。
8	JFZ	じゃ、台湾、台湾でいいよ。

談話資料ivの事例1は、JFZ と CFZ が卒業旅行の場所について話している。JFZ は国内の場合、北海道か、沖縄か、広島に行きたいと思っているのに対し、CFZ は遠いと思っているため、不同意表明が表れた。

ライン№4 で、JFZ から国内の場合は北海道か、沖縄か、広島に行きたいという意見を聞いた CFZ は、遠いと思い、ライン№5 で不同意表明を行う。CFZ への FUI で、《わざと突っ込んで親しいサインを送った》と述べていた。ここで、CFZ は不同意表明を行う際、「遠くない?近いでいいでしょう?」と意図的に「突っ込む」ことにより、親しいサインを送ろうとすることが分かる。それに対し、JFZ は《わがままぼく言って、親しく話している感じだ。不同意されても、不快にならない》と報告していた。ここから、意図的に「突っ込む」ことにより、親しいサインを送る配慮に対し、理解主体である JFZ は親しく話しているように感じていることが分かる。

ライン№5 で、CFZ から近いところでいいと不同意表明を行われた JFZ は、卒業旅行であるため、遠いところに行きたいと思い、ライン№6 で不同意表明を行う。JFZ への FUI で、《卒業旅行という理由を言った。こういう理由があるから行きたいと言った》と述べていた。ここで、JFZ は不同意表明を行う際、理由や根拠を伝えることにより、理解を促そうとすることが分かる。それに対し、CFZ は《卒業旅行という理由を言ったから納得した。なぜ遠いところに行きたがっているのか分かった》と報告していた。ここから、理由を伝えることにより、理解を促す配慮に対し、CFZ は理解しやすく感じる事が分かる。

事例 2

ライン番号(No)	話者	発話内容
199	CFZ	で、マッサージしたら、たぶんもう早く帰らないと。だって、この日帰らないといけないじゃん。
200	JFZ	3泊ということは3日間泊まれるよね。
201	CFZ	そう。今もう二日、三日、あ、まだもう一個。ただ、4日目は早めに帰らないといけない。

談話資料ivの事例2は、JFZとCFZが帰国する日にちについて話し合っている。

ライン№199で、マッサージをして、その日帰らないといけないという意見を聞いたJFZは、もう一日あると思っていただけのため、ライン№200で、不同意表明を行う。JFZへのFUIで、《「違うよ」と言う意見が対立してしまうけど、確認だと完全な否定ではない。相手に気づいてもらいたい》と述べていた。ここで、JFZは意見を対立させず、悟ってもらうため、「違うよ」と直接的に伝えるのではなく、「3泊ということは3日間泊まれるよね」と語尾は確認表現を活用し、事実を確認していることが分かる。それに対し、CFZは《質問しているので、意見を言いやすい》と報告していた。ここで、根拠を伝えるとともに、語尾は確認表現を活用する配慮に対し、CFZは質問のニュアンスを感じ、意見を言いやすく感じる事が分かる。

5. 5 分析結果のまとめ

談話資料i～ivの分析で明らかになった配慮の具体的な示し方を、類似する内容別にまとめた結果、大きく六つの概念が浮かび上がった。これらの概念を、さらに、コミュニケーション主体が場面の認識に基づき、意識、内容、形式を連動させる際に、形式に重点をおいて表現しているのか、内容に重点をおいて表現しているのかにより、〈表現形式〉〈表現内容〉という二つのカテゴリーに分類した。しかし、不同意表明を暗に示す理由のみ提示しながら語尾は同意を誘う問いかけにする、理由や根拠を伝えるとともに語尾は確認表現を活用するなど、表現形式と表現内容両方に配慮を試みている事例もみられた。分析の結果は、以下の〈表2〉を参照されたい。

<表 2：接触場面でみられた配慮>

カテゴリー	概念	配慮の具体的な表し方
表現形式	(1) 意見を緩和する表現形式	・ 語尾は断定を避ける。
	(2) 話を続けやすくする表現形式	・ 語尾は同意を誘う問いかけにする。 ・ 語尾は確認表現を活用する。
表現内容	(1) 意見を緩和する表現内容	・ 「不同意表明」の前に理解を示す。 ・ 「不同意表明」の前に同意の意見を述べる。 ・ 「不同意表明」を暗に示す理由のみ提示する。 ・ 迷いを表す。
	(2) 相手の理解を促す表現内容	・ 理由や根拠を伝える。 ・ 理由や根拠を伝える ⁴ 。
	(3) 親しさを表す表現内容	・ 意図的に「突っ込む」。
	(4) 曖昧な表現内容	・ 曖昧に伝える。

6. 考察

本節では、<表 2>にまとめた分析結果を踏まえ、表現主体の配慮が理解主体に認識された配慮はどのような意識に基づき、どのような状況で試みられたのか、表現主体と理解主体とでずれた要因はなにかについて、考察を深める。

6. 1 表現形式

表現形式には、意見を緩和する表現形式、話を続けやすくする表現形式が内包されている。

(1) 意見を緩和する表現形式

意見を緩和する表現形式として、語尾は断定を避ける配慮がみられた。

語尾は断定を避ける配慮を示す理由は、意見が断定的になることを緩和するためである。その表現には、「けど…」 「～かなあと…」が使われていた。それに対し、理解主体は言い方が柔らかいと感じている。田頭(2013)は、「けど」は言い切り回避用法としても使用されていると述べている。また、尾谷(2003)は、モダリティ要素としての「けど」を一種のポライトネスマーカーとしての機能を持つと指摘している。このように、表現主体は断定的な表現を避けることで、意見に確信を持っているわけではないことを示し、「不同意表明」を和らげたり、意見が強く伝わるのを避けたりするとともに、相手に次の「不同意表明」の余地を与えるのである。

(2) 話を続けやすくする表現形式

話を続けやすくする表現形式には、語尾は同意を誘う問いかけにする、語尾は確認表現を活用する配慮が含まれている。

語尾は同意を誘う問いかけにする配慮を示す理由は、婉曲的に伝えるためである。そう

することにより、理解主体は、意見の決め付けを感じず、受け止めやすく感じるのである。問いかけに用いられた表現形式には、「～んじゃない？」が使われていた。メイナード(2005)は、否定疑問形は意見を柔らかく提示する典型的な表現であるとしている。このように、表現主体は否定疑問文を用いることにより、表現を工夫し、相手への配慮を示しながら、問いかけるのである。

語尾は確認表現を活用する配慮を示す理由は、意見の対立を避けるためである。それに対し、理解主体は質問のニュアンスが籠っているため、意見を言いやすく感じる。用いられた表現形式には、「～よね」が使われていた。李(2001)は、意見が対立する議論の場で立場表明を行うときに、「ね」は一方的ではなく相手に配慮しながらの立場表明を助けることとしている。このように、表現主体は終助詞「～ね」を用いて、相手への配慮を示しながら確認するのである。

以上のように、表現主体は、語尾は同意を誘う問いかけにしたり、確認表現を活用したりすることにより、答えの選択権を相手に委ね、相手が不本意ながら意見を言いにくくなることを防ぎ、やりとりの展開をスムーズにする。また、相手に自分自身の意見を見つめ直す契機を与え、再度自分自身の意見と向き合い、自らの意見に修正を加えようとして答えるきっかけ作りにも繋がる可言えよう。

6. 2 表現内容

表現内容には、意見を緩和する表現内容、相手の理解を促す表現内容、親しさを表すための表現内容、曖昧な表現内容が内包されている。

(1) 意見を緩和する表現内容

意見を緩和する表現内容には、「不同意表明」の前に理解を示す、「不同意表明」の前に同意の意見を述べる、「不同意表明」を暗に示す理由のみ提示する、迷いを表す配慮が含まれている。

「不同意表明」の前に理解を示す、同意の意見を述べる配慮は、不同意の意見を緩和するためである。それに対し、理解主体は受け入れやすく感じる。このように、「不同意表明」を行う前に理解を示す、同意の意見を明確に示す配慮は、「肯定された」「受け入れられた」と感じさせるのである。また、物事を決めることが目的である話し合いにおいては、共通の意見を明確に示すことにより、相手のどの意見に対する「不同意表明」なのか、ということが明確になるため、物事を決める目的を遂行するという意味からも同意できる意見を明確に示す配慮は重要なポイントになると言えよう。

相手の意見に「不同意表明」を暗に示す理由のみ提示する配慮を示す理由は、直接的な「不同意表明」を避け、意見を緩和するためである。それに対し、理解主体は直接的な「不同意表明」ではない印象を受け、受け入れやすく感じる。「不同意表明」を暗に示す理由のみ提示する配慮を示すタイミングには共通点があり、ある話題において相手の意見が提

示された後、それについて初めて「不同意表明」を行う状況で試みられた。「不同意表明」を暗に示す理由の中身は、相手の意見を実行する際の妨げとなる事柄であった。

迷いを表す配慮を示す理由は、意見に確信を持っていないことを伝え、意見を緩和するためである。それに対し、理解主体は伝え方が柔らかいと感じている。迷いを表す配慮がみられた場の状況は、今まで主に土曜日に活動を行っており、金曜日に活動を行ったことがないため、金曜日に活動を行う際に、どれぐらいのメンバーが参加してくれるか、確実な情報がない状況で示されており、この状況については、表現主体と理解主体とで共通の認識をもっている。このように、明確な根拠がない状況で、表現主体は「どうかなあ」と伝え、迷いを表すことにより、意見を緩和しながら「不同意表明」を行っているのである。

(2) 相手の理解を促す表現内容

相手の理解を促す表現内容として、理由や根拠を伝える配慮がみられた。この種の配慮を示す理由は、自分自身の意見への理解を促すためである。タイミングは、自分の意見を主張している状況で行われた。それに対し、理解主体は理解しやすく感じたり、受け入れやすく感じたりする。このように、ある話題において「不同意表明」を繰り返している状況で、明確な根拠を述べ、説明することは、自分自身の意見への理解を促すのである。

しかし、理由や根拠を伝える配慮が、理解主体に認識されていない事例も確認できた。談話資料iiiの事例2において、CFRは相手に配慮し、理由を伝えているのに対し、JFRは配慮されたとは受け止めておらず、説得されているように感じているとともに、意見の押し付けを感じている。事例2のやりとりをみると、CFRは最初から旅行の滞在日は3泊4日がいいと決めつけており、なぜ3泊4日がいいのかという理由はしっかりと伝えているものの、JFRは何日ぐらいにしたいのか、それはなぜか、という相手の意見を確認するやりとりは行われていなかった。その結果、JFRの「滞在日数は時期によって異なる」という意見は話題に挙げられず、結果的にJFRに意見の押し付けを感じさせてしまったのである。このようなやりとりの展開になったのは、JFRとCFRの話し合いにおける決定権の「当然性」⁵の捉え方と関わりがあると思われる。CFRは、友人同士の会話では、自分自身が決定権を握っても構わないと思っているのに対し、JFRは、相手の意思を確認しながら物事を決めたほうがいいと思っており、それは友人同士であっても同じだと捉えているのである。物事を決める話し合いにおける、決定権を巡る「当然性」の判断は極めて重要であり、よりよいコミュニケーションを実現するためには、それを適切に認識する必要があると言えよう。

(3) 親しさを表す表現内容

親しさを表すための表現内容として、意図的に「突っ込む」配慮がみられた。

この種の配慮を示す理由は、親しいサインを送るためである。具体的には、談話資料ivで確認された。JFZの「国内だと北海道か、沖縄か、広島にいきたい」という意見に対し、CFZは「遠くない？近いでもいいでしょう？」と直接的に「不同意表明」を行っている。こ

の例は配慮が示されていないように見えるが、CFZは親しいサインを送るため、意図的に突っ込んであり、相手への配慮であることがCFZへのFUIで確認された。それに対し、JFZは親しく話しているように感じたと述べ、配慮されたと認識していた。

このように、全ての配慮が礼儀正しい言葉で表されるわけではない。「不同意表明」を行う際、直接的に突っ込むことにより、激しく追及できる人間関係だと示すことで、親しみを表すことができ、仲間意識を高めることができると言えよう。しかし、意図的に突っ込む配慮は、人間関係とコミュニケーション主体のコミュニケーションスタイルと密接に関わるのではないだろうか。親しくない人や目上の人に「不同意表明」を行う際、意図的に「突っ込む」と、無礼な印象を与える危険性が高いだろう。本稿の調査協力者であるCFZは、日常生活においても、親しい相手には、突っ込むことにより親しさを表すことが多く、JFZはCFZのコミュニケーションスタイルを承知していた。このように、互いのコミュニケーションスタイルや冗談を言える立場であることを承知していたからこそ、意図的に「突っ込む」配慮が有効になったと言える。

(4) 曖昧な表現内容

曖昧に伝える配慮がみられた。

この種の配慮は、談話資料iiで確認された。表現主体であるJMPは、相手に配慮し、「やってみてもいいけどね」と伝えたが、このことには実際はやりたくないという気持ちが込められていたようだ。一方、理解主体であるCMPは、ことばを額面とおりに捉え、表現主体と理解主体とでずれが生じたのである。このように、表現主体と理解主体とでずれが生じた要因は、表現主体であるJMPは、相手の気持ちに配慮し、曖昧に伝えているのに対し、理解主体であるCMPは表現に潜んでいる相手の意図を適切に理解していないことがその一要因として考えられる。このような問題を解決するためには、日本語教育で「不同意コミュニケーション」を扱う際に、表現だけではなく、コミュニケーション主体の意図を読み取る能力も視野に入れる必要があると言えよう。

7. 今後の課題

本稿では、コミュニケーション主体の立場から、物事を決める話し合いでの「不同意コミュニケーション」において、表現主体の配慮が理解主体に認識された配慮、表現主体の配慮が理解主体に認識されていない配慮、およびその要因を明らかにした。しかし、本稿では接触場面の談話資料のみ分析対象としているため、このような「配慮」は母語話者同士でも起こりうるものなのかについて論じることができなかった。今後、母語場面の談話資料も分析し、話し合いでの「不同意コミュニケーション」の様相を多角的に分析していきたい。それとともに、本稿の研究成果をどのように日本語教育における教室活動に活かしていけるのかを、理論研究と実践を繰り返しながら、追究していきたいと考えている。

【注】

- (1) 日本語能力試験 1 級に合格したものとする。
- (2) 調査協力者は、大学生、あるいは大学院生である。
- (3) 調査協力者の語りをそのまま記述している。
- (4) 斜めに表記しているのは、表現主体と理解主体とでずれた配慮である。
- (5) 行動するのに妥当性があると認識する場合は、当然性が高いとし、妥当性がないと認識する場合は、当然性が低いとする考え方である(蒲谷宏・川口義一・坂本恵 1998)。本稿では、物事を決める話し合いにおいて、自らある事柄を決定するのに妥当性があると認識する場合は、決定権の当然性が高いとし、妥当性がないと認識する場合は、決定権の当然性が低いとする。

【参考文献】

- 李善雅(2001)「議論の場に見られる「ね」「よ」「よね」について—日本語母語話者と韓国語学習者との相違—」『ことばの科学』14、pp.41-70
- 王萌(2008)『日本人と中国人の不同意表明—ポライトネスの観点から—』花書院
- 尾谷昌則(2003)「主体化に関する一考察：接続詞「けど」の場合」『日本認知言語学会論文集』第3巻、pp.85-95
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店
- 蒲谷宏(2006)「「待遇コミュニケーション」における「場面」「意識」「内容」「形式」の連動について」『早稲田大学日本語教育センター紀要』19、pp.1-12
- 木山三佳(2001)「話し合い場面での日本語学習者と母語話者の談話の比較—意見の述べにみるコミュニケーション原理の違い—」『山村女子短期大学紀用』13、pp.63-77
- 木山幸子(2005)「日本語の雑談における不同意の様相—会話教育への示唆—」『言語情報研究報告』6、pp.165-182
- 木下康仁(2003)『グランウンデット・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 梶本総子(2004)「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データを基にして—」『日本語学』23-10、pp.22-33
- 田頭未希(2013)「接続助詞「けど」の音調と意味用法に関する予備的考察」第三回コーパス日本語学ワークショップ予稿集、pp.299-306
- 野田尚史(2012)「配慮したつもりなのによい印象を与えない日本語非母語話者の言語表現・言語行動」『「配慮」はどのように示されるのか』ひつじ書房、pp.131-152
- メイナード, 泉子・K(2005)「否定疑問文」『日本語教育の現場で使える談話表現ハンドブック』くろしお出版
- 吉川香緒子(2007)「メールによる話し合いにおける「異見表明」の方法に関する考察」『早稲田大学日本語教育研究』10、pp.71-82
- (キン ケイエイ・早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程)

The aspect of "consideration" in "disagreement communication"
based on the analysis of everyday decision-making discussion aimed to determine
the traits of native Japanese speakers and Japanese learners

JIN Guiying

Abstract

The purpose of this study is to analyze how native Japanese speakers and Japanese learners handle discussions deciding everyday things. The "considerations," both recognized and not recognized by the listener, and the factors of each situation are presented with conversation examples.

According to the results, two categories, "form" and "detail," emerged. There are two types of form, the first involves giving opinions euphemistically, and the second endeavors to make the topic move on easily. (1) Giving opinions euphemistically means avoiding assertion at the end of a sentence. (2) Making the topic move on means using an interrogative sentence to gain consent, and using a flexible manner of confirmation at the end of the sentence.

There are four types of detail, the first is to give opinions euphemistically, the second is to promote understanding, the third is to be kind, and the fourth is to express something ambiguously. (1) Giving opinions euphemistically, in this case, means showing understanding before "disagreement," showing agreement before "disagreement," and implying the reason for "disagreement." Showing hesitation is a form of consideration. (2) Encouraging understanding through consideration means offering the reasons and the basis for a way of thinking. (3) Being kind means discussing the ins and outs of a situation intentionally. (4) Expressing something ambiguously means offering the consideration of explaining things vaguely.

The forms of consideration involving giving the reasons and basis and that of explaining things vaguely are forms of consideration that are out of step between speakers and listeners. The reason that a deviation between speakers and listeners occurs has to do with the perception of "Touzensei" regarding decisions in conversations, and lack of understanding of one another's intentions.

【Keywords】 Discussion, Native Japanese speakers and Japanese learners, Disagreement communication, Consideration

(Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University)